〔書　評〕

原田信一 著　福井直樹 編

『シンタクスと意味：原田信一言語学論文選集』

郡　司　隆　男

1　はじめに

本書は，1978年10月に31歳を目前にして自ら命を断った若き言語学者，原田信一氏の英語と日本語による論文の主なものを収録したものである。巻末の著作一覧によると，1966年から1978年の間に公刊された論文は計91編あるが，そのうち，英語の論文が20編，日本語の論文が12編，日本語による解説，エッセイ，インタビューなどが10編収録されている。他に，編者の福井氏によるまえがき，福井氏を含む7名による随想と解題，夫人の原田かづ子氏による著作一覧と年譜がつく。総ページ数840ページを超える大著である。

このように生産的であった原田信一氏には意外なことに英語にせよ日本語にせよ単行本の著作がない。未公刊の日本語の原稿があるようなので，これは単行本の草稿であったのかもしれないが，いずれにせよ，あまりにも早く逝ってしまったという印象である。氏の論文，特に英語で書かれたものは引用されることが多く，言語学の発展上意義のある論文が多いのだが，それらの多くが，紀要のような入手しにくい形で発表されていた。これが一冊の本の中にまとまって出版されたことは喜ばしい。

言語理論のように変遷のはげしい分野で22年以上も前の論文を刊行することに意味があるのか，という疑問をもつ向きもあるかもしれないが，今あらためて読んでみて，少しも古びていない論考ばかりである，という点を指摘しておく必要がある。もちろん，22年の間には，当時の常識が今日の常識でなくなってしまったということもある。特に，根本の前提が変わってしまって，意味を失ってしまった問題もある。しかし，それらが恐ろしく少ない，というのが本書に収められた論考の特徴である。

さて，本稿は「書評」であるが，通常の本の書評とは異なる点がいくつかある。まず，著者が生存していないということから，本書に対して批判的な評価を下しても，著者から反論をもらうことは期待できない。したがって，本稿は，評価を下すというよりは，未読の読者にその本の内容を紹介するという形にならざるを得ないことをあらかじめお断わりしておく。

もう一つの特殊な点は，本書には，いくつかの論文の著者以外による「解題」がついているということである。したがって，主な論文についてさらに解説をしつつ紹介する

ということは重複を免れないし，わざわざ「解題」にとりあげられていない論文をとりあげても，あまり意味があるとも思われない。

以上の点を踏まえて，本書評では次のような点に中心を置いて書くことにしたい。まず，「まえがき」「解題」などがすべて生成文法家によるものであるという点をふまえて，『国語学』の読者向けに，原田氏の生きていたころの生成文法とその後の生成文法はどのようなものであるかということを概説しながら，原田氏の生きた時代における彼の位置付けを試みたい。もとより，原田氏の逝去時にまだ大学院生であった評者には，当時の時代を正確につかんでいたとは言い切れないところもあり，個人的な印象によるものになるが，その点は御容赦頂きたい。

さらに，「解題」に執筆している生成文法家とはいささか違った観点から原田氏が晩年（という言い方は相応しくないが）にめざしていたと思われる方向を推測し，今日の生成文法のあり方と結びつけてみたい。もちろん，原田氏にじかに確認するすべのない今となっては，一方的な推測にすぎないが，一人の天才のあり得たかもしれない未来に少しばかり思いを馳せてみたいのである。

2　1970 年代の生成文法

生成文法という文法理論は 1950 年代の半ばに誕生した。1965 年に「標準理論」(Chomsky 1965) というものができあがり，後の 1981 年の「原理とパラメータ理論」（あるいは GB 理論）(Chomsky 1981) が登場するまでの間の 1970 年代は，理論の発展と混乱の時期であった。1970 年代前半はいわゆる「言語学戦争」の時代であり，変形によって結びつけられる複数の構造のどこに意味を対応させるかということに関して，生成意味論と解釈意味論との間の熾烈な闘いが続いていた時期である。

生成文法に変形という操作が導入されたのは，意味的にまとまっているものが形式面では離れているという，言語の形式と意味との乖離を構造に即して表現するためであった。大雑把に言ってしまえば，生成意味論は，もともと意味的にまとまっていたものが形式の生成過程で変形によって離れるという立場をとり，解釈意味論は，形式的に離れているものが解釈する段階で変形により意味的にまとめられるという主張をした。

この時期に，原田氏は，後に敗北することになる生成意味論の側に「かなりコミットしていたかのようにみえた」(p.784 の福井氏の記述) という。(評者の見落しでなければ) 原田氏が直接書いた文章からは，はっきりと生成意味論の擁護という論述はないように思うが，英語の論文の最後の方には，生成文法の中でも解釈意味論とは異なるアプローチである関係文法および依存文法へのコミットが見られる。

1970 年代後半という時代は，生成文法内部での生成意味論と解釈意味論との対立の他に，他のさまざまなアプローチが生成文法の内外で登場した時代であった。関係文法，依存文法の他に Montague の意味論 (Montague 1974) の土台となった範疇文法が再評価

されたのもこのころである。また，1978 年には，Bresnan の「現実的な変形文法」(Bresnan 1978) という，非変形文法の先駆けとなった，語彙主義の立場が打ちだされ，原田氏の死の翌年には Gazdar が，後に一般化句構造文法（GPSG）(Gazdar, Klein, Pullum, and Sag 1985) となる非変形文法のもう一つのアプローチ（Gazdar 1979 a，1979 b）を提案している。

これらの変化の激しい中で，原田氏は，標準理論－拡大標準理論という，いわば本道を歩きながら，晩年には，本道（後に修正拡大標準理論を経て GB 理論となる）からはずれるような道に興味を示しているように思える。これは一つには，氏が「本道」における意味論の取り扱いに満足していなかったことがあるのかもしれない。原田氏の意味論へのとりくみは，解題 1 の阿部泰明氏の論考に詳しいが，文の意味を真理条件に関わる「知的意味」と，発話全体が伝えるコミュニケーションの場での機能としての「情報的意味」とにわけ，それぞれに別々の構造を割り当てる。このような氏の立場は，部分的に拡大標準理論の立場を踏襲しているが，意味を一連の派生過程のどちらかの端だけに対応させてしまう，生成意味論や解釈意味論（修正拡大標準理論）とは相容れなかっただろう。今日の知見では，この問題は，複数の構造を立てるよりも，狭義の意味論（semantics）と運用論（pragmatics）との棲み分けの問題と考えるべきであるが，「本道」のやり方では「情報的意味」や運用論は切り捨てられていたのである。

実際は，この 2 つの分野に対しては，すでに 1970 年代に 2 人の哲学者による大きな貢献がある。一つは，自然言語の形式的意味論に先鞭をつけた Montague の意味論であり，もう一つは情報伝達における文字通りの意味と言語外の意味とを明瞭に区別することを可能にした Grice の協調の原理（Grice 1975）である。残念ながら，氏がこれらの文献に言及している箇所は見つけられなかったが，たまたまタイミングが合わず，読んでいたとしても論文の中にとりあげるだけの時間がなかったのかもしれない。

一方，関係文法のようなアプローチにおいては，複数の構造を扱うが，それは一方が形式，他方が意味というような単純な対応ではなく，文法関係という，形式にも意味にも関わる言語の基本的な性質が構造が変わることによって変わるというとらえ方をする。原田氏の 2 種類の意味を設ける考え方が関係文法とどのようにからんで発展していったかを見てみたかったと思う。

3　原田氏の遺したもの

しばしば，生成文法という，アメリカ人によって提唱された理論が提唱者の母語以外にも適用できるかというような類いの疑問が呈されることがある。これは自然科学の場合にはまず考えられない種類の疑問だろう。イギリス人である Newton によって発見された万有引力の法則は日本のリンゴにも適用されるだろうか，などとは誰も訊かない。しかし，対象が言語となると，いくら科学的に研究するという点では万有引力の研究と

同じであると力説してもそうは思わない人がいる。

原田氏の日本語で書かれた論文・解説はその例文がほとんど日本語である。もちろん，論じている対象が英語という個別言語に特有の現象である場合にはその限りではないが，生成文法に一般的に成り立つ原理を論じている場合には，極力日本語から例をとろうとしたのかもしれない。これは実は，今日の観点から見ても大事なことであり，言語理論が自然科学の理論と同じような意味で人類に普遍的な理論であるならば，例文の言語が何であっても成り立つのは当然のことなのである。その成果の一部は，1973 年に『国語学』に掲載された論文「構文のレベルと意味のタイプ」によくあらわれている。ここでは，日本語を例としてとりあげながら，先に触れた「知的意味」と「情報的意味」の位置づけという，生成文法理論一般の構成に関する提言をおこなっているのである。日本語を例にとることは，そこで提案されている理論が普遍的なものであるという自信があってこそのことであろう。

原田氏の日本語への関心は，氏が言語学科出身であり英語学科出身ではないということも関係しているかもしれない。今日に至るまでも，日本の大学に言語学科の数は少なく，日本で生成文法を学べるのはほとんど，英文系（英米文学科，英語学科など）である。その結果，外から見て生成文法は英語の文法という誤解が生じるのみならず，「日本語のことはよくわからない」と公言してはばからない英語学専攻の（日本人）学生に出会うことも珍しくない。このような生成文法の「英語学化」への懸念は福井氏の文章にも述べられているが，議論の余地はあるとはいえ，生成文法の研究方法の一つの特徴である，母語話者の直観によるデータを生かすことができない研究者（の卵）が多いのである。

もちろん，日本語という言語に，普遍的な原理からは必ずしも単純に帰結されないような個別的な現象がないわけではない。この点に関しても原田氏の業績が際立っていることは，敬語を扱った卒業論文によくあらわれている。敬語は，全体としては運用論に属する言語現象であろうが，本書に収録されている改訂して出版された論文は，動詞のある特定の形を使うことが適切かどうかという問題に対してはきちんとした統語的な制約があるのだということを明らかにしたものである。敬語，特に尊敬語の現象に「主語」という概念が深く関わっていることが明らかにされ，後の日本語生成文法で統語構造を議論する場合にしばしば用いられる標準的テストの一つともなっている。また，すでに，このときから，「主語」を 2 次的な概念とする生成文法の「本道」から一歩距離を置いていたことをうかがわせる。

他にも，今日，日本語文法に関して常識となっていることの多くが原田氏によって初めて提案された。一文中に「を」格の助詞を伴う名詞句が複数あらわれることを禁止する「二重を制約」は，その説明は今日に至るも決定的なものはないが，1973 年に原田氏によって初めてその存在が指摘された現象の一つである（厳密には，同じ年に柴谷方良氏によってこの制約が指摘され，原田氏も脚注で柴谷氏が先である旨を述べているのだが，両者のこ

の制約のとらえ方の違いが本書の中の黒田成幸氏による解題の中で明らかにされている)。

また，日本語の従属節の中では「が」格の助詞を伴う名詞句が「の」格を伴ってあらわれることがあるが，この現象に対して初めて体系的な扱いを示したのも原田氏である。「が－の変換」と呼ばれるこの現象に関しては英語の論文が2つ（1971年と1976年）収録されており，渡辺明氏による解題もあるので，詳しくはそれにあたっていただきたいが，原田氏がこの現象を2種類の「(世代的) 方言」を話す話者の存在として捉えていることは注目に値する。そのことの当否はともかく，国語学者との座談会などの折に見られる氏の社会言語学への関心がはやくから反映されているのかもしれない。

原田氏は『月刊　言語』の常連であり，生成文法の最新の動向をわかりやすく伝えてくれていた。また，英語教育関係の雑誌などに書かれた生成文法の解説は非常にわかりやすく，まとまった入門書が書かれなかったことがかえすがえすも残念である。

生成文法が英語学化する前の学際性を原田氏は一人で体現していたと言えるだろう。社会言語学や国語学（1974年の全国大学国語国文学会での発表に基づく「中古語受身文についての一考察」という論文では『枕草子』の中の受身文が網羅的に調べられている）のみならず，晩年には言語心理学や計算言語学にも関心を示していたという。当時の通産省電子技術総合研究所（今の独立行政法人産業技術総合研究所）の研究者たちとも親交があり，英語の最後の論文は電総研のコンピュータを使って書かれている。ワープロなどのできるずっと前のことである。井上和子氏の随想によると最後の2年間余りは電総研と大学とを結ぶコンピュータネットワークの構築に夢中になっていたという。

残念ながら，本書では言語心理学関係の論文はページ数の都合から割愛されているが，共同研究という形でおこなわれていたこの研究が，コンピュータによる言語処理の研究と結びついていたら，1980年代には，日本の理論言語学者と計算言語学者との距離ももう少し縮まっていたのではないかと残念でならない。

4　その後の生成文法

原田氏の死の直後にChomskyはイタリアのピサで講義をおこない，それが後のGB理論となった。そこでは，改訂拡大標準理論の延長として，意味はあらゆる変形を適用した最終の構造に即して与えられることになり，それは基本的に今日のミニマリストプログラム（Chomsky 1995）でも継承されている。

もし，原田氏が1980年代，1990年代にも生存していたら，果して彼はミニマリストになっていただろうか？　日本語で書かれた最後の方の論文（1977年）のタイトルは「日本語には変形は必要だ」というものであり，その中では日本語の受身文とかきまぜ(scrambling) に対して変形の必要性がかなり説得的に述べられている。ここでの主張はあくまでも当時の拡大標準理論の枠組を前提としたものであり，意味に対応する構造と形式との関係が大きく変わった今では通用しない面もあるが，理論としての首尾一貫性はある

と言えるだろう。

しかし，同じ年，およびその翌年に書かれた英語の論文では Perlmutter and Postal (1977) などを引用しつつ，関係文法への傾斜が強く出ている。しかも，単にその枠組をそのまま使うのでなく，それに依存文法を組み入れ，独自の体系を作ろうとしている。

先に述べた Bresnan の語彙主義の文法は 1980 年代になって語彙機能文法（LFG）(Bresnan 1982) として体系化された。LFG の「機能」とは文法機能ということであり，原田氏や関係文法で言う「文法関係」と同じものである。LFG は主語や目的語という文法機能を 1 次的な概念とする理論であり，原田氏との親和性も高かったのではないかと思われる。現に彼が 1975 年に提唱した Functional Uniqueness Principle は後に LFG で提案されるものと本質的に同じものであり，文法機能によるファイルターをかけると言語の記述が簡略化されるということに一早く気づいていたのである（なお，解題 5 で福井氏もこの原理に触れ，これは後の Chomsky (1981) の「θ基準」と同じものだという形で評価しているが，「θ基準」は意味役割に関わるものであり，文法機能を問題にする原田氏の原理は LFG の同様の原理に先駆けるものとして評価すべきだろう）。

一方，Gazdar の非変形文法は 1980 年代に GPSG として集大成されたが，後にそれに依存文法や，範疇文法の考え方を取り入れた形で主辞駆動句構造文法（HPSG）(Pollard and Sag 1987, 1994, Sag and Wasow 1999) として発展している。原田氏はこのような「変形を必要としない」理論をどのように評価しただろうか。

5 おわりに

『月刊　言語』では，1979 年の 2 月号に原田氏の追悼文の特集をしている。今改めて，その中のいくつかの追悼文を読み返してみると，原田氏は晩年，Chomsky の方向に疑問を感じていたという（例えば久野暲氏の追悼文）。確かに，1970 年代の後半に Chomsky はかなり大きな方向転換をしたと思う。その意味では，GB 理論は決して拡大標準理論の単なる延長でなく，新たな枠組の創設であったのだが，同時に，それまで一枚岩であった生成文法の分裂を生んだ。原田氏がその中で自分の居場所をどのように見つけていたか，それを知ることのできないわれわれにとっては，理論の発展のスピードに比べて，原田氏は人生をあまりにも急ぎすぎたと言わざるを得ない。

参考文献

Bresnan, J. (1978). A realistic transformational grammar. In Halle, M., Bresnan, J., and Miller, G. A. (eds.), *Linguistic Theory and Psychological Reality*, pp. 1–59. MIT Press, Cambridge, Mass.

Bresnan, J. (ed.) (1982). *The Mental Representation of Grammatical Relations*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press, Cambridge, Mass. 安井稔

訳,『文法理論の諸相』, 研究社, 東京, 1970.

Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris, Dordrecht. 安井稔・原口庄輔訳,『統率・束縛理論』, 研究社, 東京, 1986.

Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, Mass. 外池滋生・大石正幸訳,『ミニマリスト・プログラム』, 翔泳社, 東京, 1998.

Gazdar, G. (1979 a). Constituent structures. Unpublished manuscript. School of Social Sciences, University of Sussex.

Gazdar, G. (1979 b). English as a context-free language. Unpublished manuscript. School of Social Sciences, University of Sussex.

Gazdar, G., Klein, E., Pullum, G. K., and Sag, I. A. (1985). *Generalized Phrase Structure Grammar*. Basil Blackwell, Oxford.

Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In Cole, P. and Morgan, J. (eds.), *Syntax and Semantics*, Vol. 3, pp. 41-58. Academic Press, New York. Also in Davidson, D. and G. Harman (eds.), *The Logic of Grammar*, Dickenson, Encino, Cailf., 1975, pp. 64-75.

Montague, R. (1974). *Formal Philosophy*. Ed. with Introduction by R. H. Thomason. Yale University Press, New Haven, Conn.

Perlmutter, D. M. and Postal, P. M. (1977). Toward a universal characterization of passive. In *Papers from the Third Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 394-417. Reprinted with a revision in Perlmutter, D. M., (ed.) (1983), *Studies in Relational Grammar 1*, The University of Chicago Press, Chicago, pp. 3-29.

Pollard, C. J. and Sag, I. A. (1987). *Information-based Syntax and Semantics, Vol. 1 : Fundamentals*. CSLI Publications, Stanford. 郡司隆男訳,『制約にもとづく統語論と意味論――HPSG 入門』, 産業図書, 東京, 1994.

Pollard, C. J. and Sag, I. A. (1994). *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. The University of Chicago Press, Chicago.

Sag, I. A. and Wasow, T. (1999). *Syntactic Theory : A Formal Introduction*. CSLI Publications, Stanford. 郡司隆男・原田康也他訳『統語論入門：形式的アプローチ』, 岩波書店, 2001.

(2000 年 11 月 10 日発行　大修館書店刊　A 5 判　844 ページ　本体価格 10,000 円)

――神戸松蔭女子学院大学教授――

(2001 年 11 月 29 日　受理)